
あれがソーサラー

ミミズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれがソーサリー

【Nコード】

N5503Z

【作者名】

ミミズ

【あらすじ】

グラデイス帝国は魔法の力「ソーサリー」が支配する魔法大国。ソーサリーを習得した魔道師はソーサリーと呼ばれ、ソーサリー団体によって管理される。ローゼもまた優秀なソーサリーのひとりであり、街の治安維持を主な任務としている。街を脅かすのは、異世界「オブス」から現われる闇の生命体「ダークライフ」。人外の脅威である彼らを討伐するのは、いかにローゼといえども困難。そんな彼を支えるのが、男が超苦手な後輩美少女と、ローゼのことが大好きな巨乳上司！？ ローゼ自身もマンガ好きの困った男だが、

ダークライフをたおすことはできるのか……？ ストーリーはバトルをメインにする予定ですが、わりとラブコメ要素が多いです。

本作のメインキャラとなる三人です。今回はカラーに挑戦してみました。(・・・)

イラストのサイズはPC&スマホで閲覧しやすい様に縮小されてるみたいですが、それでも大きめなので携帯電話だと見づらいかもれません。

> i37345 | 951 <

*ローゼ・シーグムンド(ロゼ)

ソーサリー団体『黎明の光団』に所属するソーサリー。17歳。電撃を主とした攻撃系のソーサリーが得意で、魔力もずば抜けて高い。

優秀だがマンガとその他遊びが好き。性格はのん気で軽め。クラスはソーサリー・ミドル。

> i37346 | 951 <

*ルーサ・イシュメル・ファニ・ジェレマイア(イシュメル)

ローゼの一年下の後輩で新人のソーサレス。ローゼが所属するグループ『治安会第十五団』に配属されることになった。

有名な貴族の家に生まれたお嬢様で、性格はとてもまじめ。しかし男性が超苦手で、少し触れただけで気絶してしまう。

クラスはアプレンティス・ミドル。

> i 3 7 3 4 7 — 9 5 1 <

*エレイン・ユーフェミア（エル）

ローゼとイシユメルの上司で、治安会第十五団の団長。

おっとりとした女性だが、ローゼのことが大好きで彼にちょっかいを出すことが多い。

ソーサレスとしては非常に優秀で、ステータス系などのソーサリーが得意。またソーサリーツールの扱いにも長ける。

クラスはルーラー・マイナー。

イラストは今後も（時間と気力があれば）追加していく予定です。

1 (前書き)

若干エロ入ってますので、苦手な方はご注意ください。(････)

「エル、ダークライフはいた？」

夏の蒸し暑さが残る九月の夜。ローゼは上司のエレインと夜の街を走っていた。薄茶色の古びたビルがならび立つ街道は、戒厳令かいげんれいが出ているため鳴りをひそめている。

ローゼは、肩にかかる長い髪を頭の後ろで括っている。髪の色は銀色に近いペールブロンドで、肌は白人女性のように白い。身長もすらつと高く、外見はなかなか美男イケメンである。

「ダークライフは見つからないけど……」

ローゼはとなりを走るエレインを見やる。彼女は三歳年上の二十歳で、ふわふわとしたブロンドの髪を伸ばしたかわいい女性である。くりくりとした大きな瞳と、艶つややかな肌があどけなさを感じさせる。

エレインの服装はキャミソールとミニのフレアスカートで、一見すると上司には見えない。メロンのように大きな胸が、彼女の動きに合わせて上下にはげしく揺れていた。

す、すげえ。

爆発的に上下するエレインの胸を見て、ローゼは唾をぐくりと呑んだ。

「み、見つからないけど、何？」

「その、お願いだから……走りながらマンガを読むのはやめてくれ

ないかなって」

エレインは困惑の表情を浮かべて苦笑する。ローゼの手もとには、単行本『ツープース（二十八巻）』がにぎられていた。

なおツープースとは、山賊の主人公がお宝を目指して旅をするアドベンチャー系のマンガである。

「いやあ、ごめん。最近任務ばっかで読む時間なかったから」

「うん。それはわかるんだけど。……でも、普通に行儀悪いよ?」

「あはは、そだよー。でも、気がつくと身体が勝手に動いちゃうんだよね。身体がマンガを欲しているというか、何というか」

「んもう! いつもマンガ読んでばかりなんだから、こんなときまで読まなくてもいいでしょ」

「はは、それはそうんだけど」

笑ってごまかそうとするローゼに、エレインが横から飛びついた。

「あ、ちよっと! エル、何するの」

「今は仕事中なんだから、ツープースはあたしがとりあげます!」

「ちよ、ちよっと!」

ローゼはマンガ本を持った右手をあげて必死に抵抗するが、左腕からエレインの柔らかい感触がむにゅっと伝わってきて、力がだんだん抜けてしまう。

「あ、やめ」

「ほら、早くわたして! 後でちゃんと返してあげるから」

なかば抱き合うような形でエレインともつれ合い、ローゼの残り

の体力はすぐに尽きてしまった。ローゼの右手からマンガ本があっさりとりあげられる。

「ツープースの二十八巻は、ダークライフを捕まえるまでおあずけだからね」

「は、はひ……」

マンガ本と体力を失ったかわりに何かを手に入れたローゼだった。

ローゼとエレインは、ソーサリー団体『黎明の光団』れいめい ひかりだんに所属するソーサリーである。

舞台のグラディス帝国は魔法の力『ソーサリー』が発展した国であり、ソーサリーを習得した魔道師をソーサリーと呼ぶ。

ソーサリーはソーサリー団体に所属し、ソーサリーの研究と社会活動を行う。

ローゼは、帝都にあるソーサリーアカデミーを十五歳で卒業して団体に入団した。まだ二年目だが、高い魔力で何体もの敵をたおしてきた凄腕のソーサリーである。

ローゼの主な任務は、帝国の治安部（警察のこと）の補佐となる。治安官とともに現地へ行き、攻撃系のソーサリーで敵を討伐するのである。

ローゼは骨抜きにされてしまった身体に力をこめて起き上がった。

「にしても、こんな夜遅くに街に出てくるなんて、ダークライフは非常識だね。駆り出される身にもなってほしいよ」

「そんなこと言ったって、しょうがないでしょ？ ダークライフは

夜に活動する種族なんだから」

ため息をつくエレインの前で、ローゼは背中をだらりと丸めた。

「そりゃそうだけどさあ。だって今、夜の十一時だよ？ あと一時間で日付変わっちゃうんだよ？ 何でそんな時間にわざわざ出てくるわけ？」

「出てくるわけって、あたしに言われても困るけど」

「あーもう、今日は二時までツープース読んでようと思ってたのに、とんだ邪魔者が入ったもんだ！」

「ツープースで夜更かしするな！」

エレインは呆れてローゼに叫んだ。

* * *

ローゼたちの住む人間界とは違う、第二の世界が存在する。

その世界を『オブス』という。

オブスは日の光があたらない闇と氷に閉ざされた世界で、『ダークライフ』という闇の住人たちが棲んでいる。ダークライフは光を求めてゲートを開き、人間界へと姿をあらわす。

ダークライフは人間界をわが物とするため、頻繁に出現して街を襲う。彼らを見つけ、討伐することがローゼたちに課せられた任務となる。

「ところでエル、今回のダークライフはどんなやつらなの？」

ローゼは街道を走りながらエレインに問う。エレインは揺れる巨乳を腕で押さえながらとなりを走っている。

「治安部の報告によると、彼らは十六体。すべて人型で、司令塔のダークライフは強力なソーサリーをつかうらしいわ」

「うわっ、上位のダークライフとはまた面倒な」

「でもロゼだったら楽勝よ。だって黎明れいめいきつての天才ソーサリーなんだから！ だから今日もがんばってねっ」

「うわ、超押しつける気まんまん……」

かわいい笑顔を向けるエレインに、ローゼは露骨に嫌そうな顔をした。

ダークライフの容姿は、人型からモンスターのようなものでさまざまである。人型のダークライフは力が弱いかわりに高い知能を持ち、ほとんどの者が高度なソーサリーをあつかう。

上位のダークライフは捕まえるのも倒すのも難しい。そう考えただけで気が重くなるローゼだった。

街の大通りをまっすぐに抜けると、対角線状の道が交差する十字路にたどりついた。広い公園のような十字路には、制服を着た治安官とソーサリーたちがたおれている。

「これはひどい」

ローゼが唾然としながらあたりを見わたすと、近くの建物が倒壊していた。まるで大砲で打ち抜かれたように壁に大きな穴が開けら

れ、崩れた石片が路上に散らばっている。

「おや、また新手が来ましたか」

突然の聲が上から聞こえて、ローゼとエレインは夜空を見あげた。二階建てのパン屋の屋根の上に、背の低い男が立っていた。

黒い髪を生やした、子供のような男だった。白いシャツの襟えりに黒のネクタイを締めて紳士然としているが、ふっくらとした頬が妙な違和感をおぼえさせる。

こいつか。

彼の身体から、漆黒のアニマ（魂の力）が湯気のように放出されている。ローゼはひと目でわかった。彼が司令塔のダークライフだと。

「はじめまして。私はランシアといいます」

頭を下げたダーククライフ　ランシアをローゼがにらみつける。

「あんたかい？　こんな時間に出てきて街を破壊してるダーククライフっていうのは」

「ええそうですよ」

ランシアがふふとあざ笑った。

「光に慣れていない私たちは、夜でないと活動できませんからね」

「そうかい。じゃあそろそろ日付も変わっちゃうことだし、おとなしく降参してもらおうかな？」

「できるんですか？　あなたたちに」

ランシアは目を細めてアニマの力を強める。

身がまえるローゼのとなりで、エレインが彼の腕に手をまわした。

「できるわよ！　あたしたちの愛の力にかかれば、あなたなんて瞬殺なんだからね！」

「ちょっと待て。愛の力って何だ　て、うおっ！？　気づいたら腕組まれてるし！」

ローゼが慌てて離れると、エレインは目をうるうるさせた。

「そんな……！　忘れちゃったの？　昨日、あたしに言ってくれた

こと」

「き、昨日は、普通に休みだったと思うけど」

「そうよ！ 昨日、ロゼはだれもない夜の公園にあたしを呼び出して、言ってくれたじゃない！ これからはいっしょに暮らそうねって」

「言っていない言っていない。ていうか夜の公園って何？ まったく記憶にないんだけど」

「そんな、ひどい……！ あたしをあんなに弄んでおいて、まったく記憶にないなんて。あたしのはただの遊びだったの！？」

「待って待って！ いつからそんな関係になったんだ。俺たちはただの上司と部下だろお！」

慌てふためくローゼを見て、ランシアが声を出して笑った。

「いきなり何を始めるのかと思えば。みごとな夫婦漫才めおとまんざいですね」

「漫才ではないわ。だって本当の夫婦なんだから」

「だから違っただろおおオオオオ！」

ローゼははつとわれに返り、腰を少し落とした。

「おっと、こんなところで三文芝居してる場合じゃなかった」

「違ったのですか？」

「あたり前だ！ って、あんたがつつこむなよ、ランシア。やる気なくなるじゃないか」

「ふふっ、ならそのまま帰宅していただいてもけっこうですよ」

パチン、とランシアが右手の指を鳴らす。まわりのビルの陰から、全身を黒の服でつつんだダークライフたちがずらりと姿をあらわした。

「しかしお帰りいただけないというのなら、私はあなたたちを抹殺しなければいけません」

ランシアの号令で、ダークライフたちが一斉に襲いかかってきた。

「さあ、私たちを阻害する愚かな人間たちを殺害するのです！」

ダークライフたちはまっすぐに突進し、剣や爪でローゼを斬りつける。ローゼは後退してダークライフの剣撃をかわした。

「仕方がない。……エル、こいつらを殲滅するぞ！」

「わかったわ！」

くすりと笑うエレインに背を向けて、ローゼは続けて襲いかかってきたダークライフの攻撃をかわした。その周囲をダークライフたちがしつこく包囲してくる。

街灯の近くに逃げたローゼの背後を、大きな影が覆いかぶさった。二メートルを超える巨体のダークライフが腕を大きくふりかぶり、鉄柱のような巨大な鉈なたをたたきつける。

「ちー！」

ローゼは鉈をかわしながらダークライフの背後にまわりこむ。同時に心の中で魔法語をとねえた。

ローゼのアニマが電気を具現化し、懐ふくしほに引いた両手からばちばちと青白い火花が放たれる。

ローゼは両手を突き出し、掌てのひらで形成された光の球たまを押しつけた。

メガホルト
「電撃！」

光の球がダークライフの背中で炸裂し、紫電を八方に放出させる。ダークライフは身を焦がしながら吹き飛び、向こうのビルの壁に激突した。

* * *

ソーサリーは、思い描いたイメージを具現化する能力である。

能力を発動させるためには、具現化したい能力を想念し、同時に魔法語と呼ばれる言語を心の中でとなえなければならぬ。魔法語とは、能力を具現化する手順を記した特殊な呪文である。

精神の中にあるとされる魔力がイメージと魔法語を読みとり、体内のアニマ（魂の力）をつかって力を具現化する。

ソーサリーは正しい手順を踏めばだれでも扱える、グラディウス帝国でもっともポピュラーな能力である。またソーサリーは攻撃を主としたものから、回復系、ステータス系など種類は多岐にわたっている。

ローゼは電撃でメガホルト
ダークライフたちを吹き飛ばしていく。十体以上もいたダークライフたちが次々とたおれていく。

「エル、そっちはどう」

後ろにいるエレインにふり向いた瞬間、ひも状の鞭の先端が恐る

しい速さで迫ってきた。ローゼは「ひいひい！」と悲鳴をあげて鞭をよけた。

「おほほほほ！ あたしを女王様とお呼び！」

エレインは、具現化した鞭を高笑いしながらふりまわしていた。

「な、何やってんの？」

「何ってSMプレイだけど？」

「いや、それはわかるんだけど。……なぜこのタイミングでSMを？」

「だって、前から一度やってみたかったんだもんー」

エレインは頬に手をあててうっとりする。彼女のまわりでは四体のダークライフがうずくまり、苦しそうにつめき声をあげている。

何気に効いてるし。

げんなりするローゼをエレインがとろんとした目で見つめる。

「もしかしてロゼも虐めてほしいの？」

「えっ」

ぼけつとするローゼの足に鞭が高速でふりおろされる。ばちん！というかわいた音と「あいたあああああ！」という悲鳴が夜空にひびきわたる。

「ほらほらあ、早く逃げないとロゼも女王様の奴隷になっちゃうわよ」

「ば、ばか！ やめろ！ こんなところでぶざける あいたああ

「ああい！」

「あら、女王様に向かってはかだなんて、何て無礼な奴隷なのかしは！」

正気に戻ったのか、エレインは急に追うのをやめて具現化した鞭を消失させた。

「あ、そうだ！」

「いたた、やっと正気に戻ったか」

「ローゼはSMよりもブルマの方が好きなんだよね〜」

「だあつ、いらんこと言うなああああ！」

絶叫するローゼの背後にランシアがまわりこむ。とっさに後退するローゼとエレインの前で、ランシアは「長剣ソード」とソーサリー名をつぶやいた。

ランシアが具現化した剣でローゼに斬りかかる。ローゼも腰に差した剣をすばやく抜き放ち、ランシアの剣を手荒く弾いた。

「すばらしいですね。間抜けな漫才コンビのようですが、今まで相手してきたどのソーサリーよりもあなたたちは強い」

「そいつはどーも！」

ローゼは右足を踏みこんでランシアに斬りかかる。白銀の剣閃が夜空を裂き、ランシアの持つ白刃と火花を散らす。

「しかし」

「しかし、何だ？ いい加減にあきらめて降参する気になったか？」

不敵な笑みを浮かべるローゼを見て、ランシアが「ぷ」と口もと

をおさえた。

「まさかブルマフェチだったとは」

「な……！」

ローゼの顔が林檎のように赤くなった。

「い、いいじゃんか！ 趣味は人それぞれなんだからよお！」

「私は別に悪いと言ってませんよ？ ただ、意外だったなあと思っただけですから。……しかしブルマとはまたマニアックな……ぷぷぷ」

「お前何でブルマとか知ってたんだよ……」

ぐぬぬと狼狽するローゼの前で、ランシアは後ろに高く跳躍する。空中でぐるりと一回転し、屋根の上に降り立った。

「茶番はこの辺で終わりにしましょう。私はそろそろ撤退させてもらいますよ」

「あつ、待て！」

ランシアは嘲弄してうろくとなりの屋根に飛びうつる。その後をローゼとエレインが追いかける。

「彼を放置したら街の被害が拡大するわ。……ロゼ！ 今日中に彼を捕まえるわよ！」

「お、おう」

巨乳をゆらしながら走るエレインの後にローゼはつづく。

にしても、また面倒なやつが現われたもんだな。

エレインの胸をちらりと見やりながらローゼは思った。

半開きにされた窓から、穏やかな風が部屋に入りこむ。なびいたブルーのカーテンのすき間から陽の光が差し、ローゼの顔を眩しく照らす。

「あ、朝か」

ベッドの上で熟睡していたローゼは、光の眩しさに目を覚ました。うっすらと目を開けると、ベランダの柵の上に小鳥が二羽止まっている。

ローゼは腕に力をこめて身体をゆっくりと起こした。寝不足のせいか頭の後ろがずきずきする。

昨夜はダークライフのランシアを追いかけて、夜中の三時すぎまで街を走りまわっていた。結局ランシアを見つけないことができず、くたくたに疲れて自宅の寮に帰宅したころには四時を過ぎていた。

そのまま着替えもせずにベッドにたおれこんで今にいたっている。

「て、今何時だ!？」

ローゼははっとして枕もとにある目覚まし時計を見やる。時計盤の上にある時計針は十時を差していた。

「うわっ、やばい。完全に寝坊だ」

ローゼはぐったりしてベッドにまたたおれこむ。遅刻するかしな

いか瀬戸際の時間ならば焦って身支度をはじめるが、遅刻が完全に決まっていると急ぐ気持ちがわかなくなってしまう。

「まあ、あんな時間まで仕事してたんだから、寝坊するのはしかないよね。エルだって朝まで仕事してたんだから、今日はきつと寝坊してるだろうし」

自分にそう言い聞かせて、ローゼはゆっくりと身支度をはじめた。

* * *

ローゼとエレインが住んでいる街はウエストフォークという。グレイス帝国西部の大都市で『西の拠点』と呼ばれている。

帝国の領地は広大で、センティア大陸の半分以上を支配している。ウエストフォークは横に長い帝国領の西端に位置し、商業都市として今なお発展している。

街の中央にはラズ教の大神殿があり、帝国有数の観光スポットとしても知られている。ラズ教は、帝国の国教になっている宗教である。

ソーサリー団体『黎明の光団』のウエストフォーク支援部は、神殿や繁華街のある地域から離れた場所に建てられている。施設のとなりには団体の管理する寮があり、ローゼはそこで寝泊りしている。

寮と支援部の移動時間は、ゆっくり歩いても十分もかからない。

ローゼは温かい陽気をあびながら支援部へと向かった。

「ちーっす」

ローゼが支援部の宮殿のようなロビーに入ると、中はとても閑散としていた。ロビーはいつも人の出入りが多いのだが、今日は受付の女の子ひとりしかいない。

「今日はずいぶん静かだな。……まあ、十時に顔出すやつがないだけかもしれないけど」

受付の女の子に団体の胸章リボンを胸につけるマークを見せて、ローゼは赤い絨毯じゅうたんの廊下を歩く。そのまま別館まで歩いて階段で三階まであがる。

三階の廊下を少し歩くと、ローゼとエレインが所属するグループ『第一陣治安会第十五団』のフロアになる。

「おじゃま、しまーす」

ローゼは戸口のわきから室内をおそるおそるのぞきこむ。だが、フロアの中にも人の姿がない。普段は同僚のソーサラーたちが席についているのだが、今日はなぜかひとりもいなかった。

「あれ？ おかしいな。やっぱりだれもないぞ？」

ローゼは入室して腕を組む。今日は外で参加するイベントの日だっただろうか？

「ん？ 待てよ。だれもないってことは、今日の遅刻はだれにもばれていない……？」

ローゼは口を広げてにんまりする。しめしめ、そういうことなら今日は遅刻していないことになってしまおう。

ローゼは何食わぬ顔で席につこうとしたが、

「何してるの？」

背後から突然エレインの声がかかり、ローゼは「ぎゃー！」と絶叫しながら飛び上がった。

「どうしたのよ、化け物に遭遇したような大声出して」

「えっ？ あ、あははー。いや別にいい。エルちゃんいたんだあ」

「あたり前じゃないの」

びくびくするローゼにエレインがすり寄る。

「何？ その嫌そうな顔。あたしと会えたのがうれしくないの？」

「い、いや、うれしいよ。すっげーうれしいよ！ 嗚呼、今日もエルの顔が見れて、さ、最高だなあ！」

無理してうれしがるローゼの腕にエレインが抱きついた。

「うわあ！ 止め」

「あたしがこんなに想ってるのに、ロゼはどうしていつも嫌がるの？ ロゼだって本当は嫌じゃないでしょ？」

「い、嫌じゃない、けど、おっぱいが、おっぱいがあたって……」

ローゼはわれに返ってエレインを強引に引き離す。エレインは唇に指をあててうれしそうな顔をした。

「んもう、相変わらずお堅いのねえ」

「か、堅いとかじゃなくて、今のはいかんでしょ！？ だれかが見てたらどうすんの」

「別に見られてたっていいじゃない」

うふふと意地悪い視線を送るエレインを見て、ローゼは「見られてもいいんかい」と肩を落とした。

「それで、さっきはびくびくしてたけど、どうしたの？」

「えっ、あ、ああ」

ローゼは申しわけなさげに頬を掻いた。

「その、はげしく寝坊しちゃったから」

「あ、そのことね」

エレインはくすりと微笑した。

「昨日はあんな時間までランシアを探してたんだから、しかたないわよ」

「ん、そか……て、え？ お咎^{とが}めなし？」

「うん。昨日遅かったから、今日は休んでもらおうかなって思ってたのよ。……でも遅刻は遅刻だから、次からは気をつけてね」

エレインがかわいらしくウィンクする。ローゼは思わずどきりとした。

そのまま「はあああ」と安堵の息を吐いてローゼは席に座った。

「そっかあ。てつきりエルにしばらくられると思ってただけに、うれしさも半端ないよあ」

「もしかして、しばらくの方がよかった？」
「い、いえ、けっこうですっ」

ローゼは首をぶんぶんと横にふった。

「でもそういえば、エルは寝坊しなかったの？ 普通に朝からいたみたいけど」

「ううん、あたしもちょっと寝坊しちゃったわ。今日は寝ないで来ようと思ってただけど、ベッドに横になったらそのまま意識うしなっちゃって」

「四時すぎに帰ったらそうなるよね」

ローゼは机にだらりともたれた。

「それで、今日は何でだれもないの？ ロビーもずいぶん静かだったけど」

「それは昨日のせいだと思うわ」

「昨日のせい？」

エレインがこくりとうなずく。

「昨日、ランシアがあらわれて街をめちゃくちゃにしたでしょ？」

「それでうちの団員がみんな怪我けがしちゃったのよ」

「それか。昨日はほんとひどかったからなあ」

「怪我をした子は病院に搬送されて治療を受けてるわ。他の子たちも見舞いに行ったり、治安部に手伝いしに行ってるから、みんな外に出ちゃったの。あたしもこれから病院に向かうつもりよ」

「ん、そっか」

「ローゼもいっしょに行く？」

ローゼは頬杖をついて少し考える。

「俺は治安部に顔出そうかな。あれからどうなったのか聞いておきたいし」

「えーっ、ロゼもいっしょに病院に行こうよお」

エレインがまた抱きついて胸の谷間に腕を押しつける。ローゼは慌てて立ち上がった。

「だ、だから止めるって」

「今日はお仕事なくていいから、あたしといっしょに病院に行こう？」

「いや、『行こ?』てかわいく言われても、俺は別に怪我してないし、て、ああ……」

エレインの胸があたり、ローゼの気持ちが悪くだけてしまう。

「ほらほら、顔が赤くなってるわよ。ちょっと熱っぽいんじゃない?」

「ち、違うわ!」

ローゼはエレインを無理やり引き剥がした。

「だから、抱きつくのはやめてって言ってるでしょ。だれかに見られてたらどうすんの!??」

「ふふっ、それならだいじょうぶよ。今日はだれもいないんだから、ここでいちゃいちゃしたって」

がたつと、後ろから物音が聞こえて、ローゼとエレインは戸口に振り返った。

ドアノブを引いてこちらをのぞいているのは、十五歳くらいの女の子だった。

栗色のセミロングの髪を頭の後ろで括り、ポニーテールにしている。セーラー服のような三角の襟のついたシャツを着て、ひらひらとした紺のプリーツスカートをはいていた。

女の子は丸い顔をまっ赤に紅潮させて、こちらをじっと見つめていた。半開きになっている唇は少しふるえ、「あ、あ……」と吐息に似た声がもれている。

ローゼとエレインは互いの顔を見つめてわれに返った。

「しまった」

「すすす、すいません！ お楽しみのところを、の、のぞき見してしまってます！」

セーラー服の女の子は、ふたりの視線に気づいて慌てて頭を下げた。

「で、でも！ おふたりの邪魔は、ぜぜぜ絶対に、いたしませんのでっ、その」

ローゼもあたふたしながら首を横にふった。

「ち、違うんだ！ 俺たちは、君が今想像してるようなやましい関係じゃないから！」

「そ、そうよ！ ここでエッチなことしようとか、そんなことは全然思ってたからね！」

言葉をつづけるエレインに、ローゼはうんうんと何度もうなずく。だが女の子は顔を赤くさせたまま、入室をとまどっているようだった。

「で、でも、おふたりの邪魔をするわけには……」

「邪魔じゃない。全然邪魔じゃないよー！ だから、ささ、気にしないで入って！」

ローゼが手招きすると、女の子は申しわけなさそうに部屋に入った。

初めて見る子だな。

ローゼは女の子をそれとなく観察する。

彼女の背はかなり小さい。身長が百七十八センチあるローゼの肩よりも、彼女の頭頂部は低いところにある。おそらく百五十センチくらいしかないのではなからうか。

歳はローゼよりも一年か二年下で、慣れない場所に来て緊張している姿がとても初々しい。こんなかわいい子が自分の後輩になってくれたら、毎日がきつと楽しくなるんだろうなあとローゼは思う。

今年の新人か。他所の支援部から来たのかな？

「うちでは見かけない子だけど、他所のグループから来たの？」

エレインがそう問うと、女の子は堅い表情のまま口もとを少しゆるめた。

「はい。あの、私は治安会第二十三団から参りました、名前はルーサ・イシュメル・ファニ・ジェレマイアといます。私のことはイシュメルと呼んでください」

「イシュメルちゃんね」

「はい！ 今日はこちらで異動の手続きをしていましたので、こちらに来るのが少し遅れてしまいました。今日からお世話になりますので、よろしくお願いします」

「うんうん。こちらこそよろし　て、えっ？　お世話に……？」

エレインは首をかしげた。

「ってことは、うちに配属になったってこと？」

「はい。……あの、通達はされてるはずですけど」

「そうなの？ そんな話あったかしら……？」

困惑するイシユメルの前で、エレインは顎あごに手をあてて考える。

黎明の光団は、第一陣から第四陣というグループに分かれている。

ローゼが属する第一陣は治安部や病院に派遣され、団体の主務を担当する。第二陣はソーサリーの開発と研究を担当し、第三陣はソーサリーの育成を担当する。そして第四陣は人事などの雑務を担当する。

帝国の治安部（警察）の補佐を行うグループ『治安会』は第一陣の中にあり、治安会はさらに担当する区域によってグループが細かく分かれている。

ローゼが所属する『治安会第十五団』は、ウェストフォークの治安維持が主務となる。

しばらくしてエレインが「ああ！」と手を打って喜んだ。

「そういえばこの前、二十三団のジャレッドさんから、新人の子を送るからよろしくねって手紙もらったわ」

「ああ、やっぱり」

「でもごめんね。昨日ちょっと色々あって、うちのメンバーはみんな外に出ちゃってるのよ。だから、みんなの紹介はまた後にしてね」

「何かあったんですか？」

「うん。昨日の夜にダークライフが現われてね……」

「ダークライフが現われたんですか!？」

イシュメルが愕然と顔色を変えた。

「そうなのよ。おかげでもう寝不足よー」

「それで今日はおふたりだけだったんですね」

「そういうこと」

エレインは背を正してイシュメルに右手を差し出した。

「あたしは治安会第十五団の団長で、名前はエレイン・ユーフェミアっていの。よろしくね」

「はい！ よろしくお願ひします、団長」

イシュメルは顔をぱつと明るくして、エレインの手を両手で握るんだ。

まともそつな子だな。

ローゼはイシュメルにはれないように、横目でちらりと見やる。彼女は頬を紅く染めながらエレインと会話している。新たな上司となったエレインを尊敬しているのだろうか。

しかし、なかなかかわいい。イシュメルに気づかれないように、ローゼは彼女と目を合わせないようにしているが、つい見とれてしまふ。

というより、ポニーテールで背が小さいのは卑怯だ。

「えっと、おほん」

ローゼがわざとらしく咳払いすると、イシュメルとエレインが顔を向けた。

「俺の紹介がまだなんだけど」

「あ、ごめん。そうだったわね」

ローゼはイシュメルに身体を向けて頬を掻いた。

「俺の名前はローゼ・シーグムンド」

「ローゼ先輩、ですか」

「そう。君のいつこ先輩だから、わかんないことあつたら聞いて」

ローゼはそれとなく右手を差し出した。「その、よろしく」

しかしイシュメルは握手をせず、ローゼの手を見たまま身体をふるわせていた。頬から耳たぶまで顔をまっ赤にして、みんなの前で発表するときのようにすごく緊張していた。

「えっ、何？ この状況」

困惑するエレインの前で、イシュメルは握手できずに困っているようだった。おそろおそろ差し出した右手は小刻みにふるっている。

大きな瞳には涙が浮かび、今にもあふれ出しそうだった。

な、何で、こんなに緊張してるんだ？

イシュメルは嫌がっているのではなく、恥ずかしがっているようだった。しかし握手することがそれほど恥ずかしいことなのだろうか？

ああもう、めんどくさい！

ローゼは手をのばしてイシユメルの手をとった。

「よ、よろしくー！」

「ひゃいつー!？」

手が触れたとたん、イシユメルは変な声を出して飛び上がった。紅潮が最高点に達し、頭の上から「ぼん！」と小さな硝煙があがる。

「あ、あ………」

彼女は目をまわしてその場へたりこむ。そのまま意識を失い、ぱたりとたおれてしまった。

「えっ、たおれた……?？」

ローゼは何が起きたのか理解できなかったが、イシユメルのまるで天国に召されたかのような安らかな寝顔を見て、顔を青くした。

「ちよっ、ええええええええええ!？」

「うそっ!?! イシユメルちゃん、何でたおれてるの!?!」

「か、看護室! 看護室ううう!」

イシユメルの身体をゆするエレインの後ろで、ローゼはわけもなく叫んだ。

* * *

「すみません。あの、私は、男の人に触ると気絶してしまう体質なんです」

一階の看護室に運んでからイシュメルはすぐに目を覚ました。看護ベッドの布団にくるまりながら、彼女はそう言った。

「これでもだいぶよくなったんですけど。会話は何とかできるようになったので」

「えっと、それって体質なの……?」

エレインがあきれながら返すと、イシュメルは赤面して口をつぐんでしまった。

「あ、べ、別におかしいとか、そういうことを言いたいんじゃないからね!」

「いいんです。自分がおかしいのはもうわかってますから……」

イシュメルはほろりと涙をながした。

ローゼは彼女を見下ろして、そっと腕組みした。

「だから俺と握手できなかったのか」

「はい。……あ、あのっ! ローゼ先輩のことが嫌いだとか、そういうことではありませんからっ!」

「いいんだよ。全然気にしてないから……」

ローゼは両目からどばっと滝のような涙をながした。

「ま、まあ、これからよろしくね」

「じゃあ、そろそろ治安部に行こうかな」

ローゼは起きあがって背中をぐっとのばした。

「イシユメルもいつしよに来る？」

「は、はひっ!？」

イシユメルの肩がびくつと反応した。

「わ、私も、ですか」

「呼ぶだけでだめなんかい」

ローゼが白い目で見つめると、イシユメルが「う」と身体をのけ反らせた。

「すみません。あの、ちょっと油断してたので」

「俺はモンスターか」

「あ、い、いえ、モンスターだなんて、そんな」

「まあ、気をとり直して」

ローゼは軽く咳払いした。

「イシユメルもこれから治安部の人のお世話になるんだから、挨拶しに行かなきゃだめでしょ？」

「そ、そうですね。でも……」

言いながらイシユメルはまた頬を紅潮させた。

「おお男の人と、ふたりで行くんですか……！」

ローゼはかぶりをふった。

「だ、だいじょうぶだった！ 身体に触ったりしないから。触らなきゃ平気なんでしょ？」

「は、はい。……でも、ちっち治安部にも、男の人が、もっさりと……」

「治安部もだめなんかい」

ローゼはあきれて閉口した。

「じゃあ、今までどうやって仕事してきたの……？」

「すすすみません！ 私としたことがっ……！」

イシユメルは背中をだらりと丸めた。

「そうですね。治安会に所属してるソーサレスなのに、治安部に行けないとか言っではいけませんよね」

「う、うん。まあ」

「……わかりました！ 私もいつしよに治安部に行かせてください！」

イシユメルは立ちあがって両手をにぎりしめる。ローゼは安心して頬をゆるめた。

「じゃ、行くうか」

「ちよっと待って！」

すると突然エレインが悲鳴に似た声をあげた。ローゼとイシュメルは驚いてエレインにふり向く。

エレインはにこつとつくり笑いをした。

「イシュメルちゃんは、あたしといっしょに病院に行く?」

「えっ、どうしてですか?」

「そ、それは」

エレインは言葉をつまらせた。

「ま、また、急にたおれるかもしれないでしょ? だから、病院で診てもらった方がいいんじゃないかなあって」

「いえ、平気ですけど」

きっぱりと否定するイシュメルに、エレインが半歩たじろぐ。彼女は次にローゼに笑顔を向けた。

「じゃあロゼ、いっしょに病院に行く?」

「だから俺は行かないって」

「あ、そうだったっけ。でも」

「ていうか、イシュメルひとりで治安部に行かせるわけにはいかないでしょ? 男が苦手っていう属性もあるけど、イシュメルは今日初めて治安部に行くんだから」

傍らでイシュメルがうんうんとうなづく。「そんなあ」と半べそをかきエレインに背を向けて、ローゼは手をふった。

「じゃ、そゆことでー」

「ま待って!」

エレインががばつとローゼに抱きついた。

「だあ！ 何なんだよ、さっきから！」

「あなたたちが別々に行くのはいいけど……ふたりでいっしょに行くのは絶対だめ！」

「えっ、だから何で？」

「何でって……」

エレインがうるうると子供のよ様な泣き顔を向ける。ローゼはあきれ彼女を押しつけた。

「イシユメル、行くぞ」

「ああん、待ってってばあ！」

* * *

「ふたりで行くのはだめって、何言ってるんだよ。エルは。意味わかんないよ」

「単にやきもちやいてるだけだと思いますけど」

ローゼとイシユメルは支援部を出て、なだらかな坂を降りる。治安部のウエストフォーク支部は坂を下りた街のはずれにある。

「そういえば、ローゼ先輩のクラスは何なのですか？」
「クラス？」

ローゼは顎に手をあてる。

「クラスだったらソーサラー・ミドルだけど？」

「えっ、ソーサラー・ミドル!? ローゼ先輩って二年目なのに、もうソーサラーのクラスなんですか!」

「え、ま、まあ」

ぱつと明るい笑顔を向けるイシュメルに、ローゼは照れくさそうに頭を掻いた。

クラスは、ローゼたちソーサラーの団体内での階級のことである。

クラスはメイガス（指導者）、ルーラー（支配者）、ソーサラー（魔道師）、アプレンティス（徒弟）という四つのメジャークラスに分かれ、それぞれはさらにメジャー（上）、ミドル（中）、マイナー（下）というマイナークラスへと細分化されている。

クラスを呼ぶときは両者をつなげて、『ソーサラー・ミドル』などと呼ぶのが一般的である。

団体に入団してアプレンティス・マイナーに就いたソーサラーたちは、およそ半年でアプレンティス・ミドルに昇格する。

ソーサラーのクラスに就くためには、最低でも三年はかかると言われる。ソーサラーのクラスに就いて初めて一人前のソーサラーと認められるのだった。

「イシュメルのクラスはソーサラーじゃないの？」

「私なんてただのアプレンティスですよ。アプレンティス・ミドル」

「そっか。まあ、入団して半年しか経ってないんだから、仕方ない

んじゃない？」

「先輩が言うとなぐさめになってないです」

がつくりと肩を落とすイシユメルを見て、ローゼは苦笑した。

「ちなみにエルのクラスはルーラー・マイナーだよ」

「ルーラーってソーサラーの上位クラスですよ。先輩も団長もすごいですね。まだお若いのに……」

「エルはあー見えても団長だからね。ぱっと見はただの金髪お姉さんに見えないけど」

「そうですけど。……そんなこと言っていると団長に怒られますよ」

二人は坂を下りて、閑静な住宅街を散歩するよつにのらくらと歩く。

まっすぐに伸びる道の先に治安部の建物が見えてきたところで、

ローゼは「うーん」とうなり声をあげた。

「そつだなあ」

「さつきから何つなってるんですか？」

イシユメルが見かねて声をかける。ローゼは腕をそつと組んだ。

「それがね、どうしても先に寄っておきたい店があるんだよ」

「仕事中的なお店に寄るんですか……」

イシユメルは肩を落とそうとしたが、ローゼの気持ちに気づいて笑顔を向けた。

「あ！ 治安部の人に差し入れを買っていくんですね！？」

「マンガを買いに行くだけだよ」
「えっ、マ、マンガ……？」

やはりがくつと肩を落としたイシュメルに、ローゼはきらきらした目を向けた。

「それがさー。最近仕事ばっかで全然気づいてなかったんだけど、ツープースの二十九巻がこの前発売されてたんだよね」

「あ、そ、そうだったんですか……」

「俺のまわりにはツープースフリークが多いからさー。先を越されちゃってすげー悔しいんだよね。ってなったら、二十九巻買いに行くでしょー！」

「行くでしょ！ って言われても、あの、今は仕事なんですけど」
「」

まじめに突っこみを入れるイシュメルに、ローゼがいやらしい顔を向ける。イシュメルは「ひゃっ！」と悲鳴をあげた。

「だいじょうぶだって」

「何がだいじょうぶなんですか！？ それと急に顔近づけないでくださいっ！」

「今日のもともと非番になる予定の日だったんだから、本買いに行ってもだいじょうぶだって。エルだって見てないんだから」

「エル エレイン団長が見てなくても、私が見てるからだめですっ！」

「イシュメルはまじめだなあ。ちょっとくらい本屋に寄っても平気だって。……一日は二十四時間もあるんだよ？ ほんの数分悪いことしたって、天国にいるゼヴィア様は赦してくれるよー」

「悪いことしてるっていう自覚はあるんですね……」

ローゼはくるりと背を向けて、治安部のある道とは正反対の道を歩く。イシユメルはあきれ果てて、突っこみを入れる気力がなくなっていました。

ローゼとイシュメルはしばらく歩いて繁華街にたどりついた。

「本当に来てしまった」

「店の前で何言ってるの？」

本屋の前で立ち尽くすイシュメルに、ローゼがいぶかしい視線を送る。

「そんなとこに立っていると、みんなの迷惑になるよ」
「って、ちょっと!」

何食わぬ顔で本屋に入ろうとするローゼをイシュメルが呼び止めた。

「本当にお店に入りますか!？」

「そりゃまあ」

「まあって……」

イシュメルが道端にがくつと膝をつく。

「仕事中に遊んでいいんですか!？」 団長にしかられますよお!
「だからだいじょうぶだって。エルは今ごろ病院に向かっていると
るだから、俺たちが本屋に行ってることなんてわかりやしないうて
「あの、そういう問題じゃないと思うんですけど」
「えっ、じゃあどういふ問題？」
「ああもう! だから」

イシユメルはいきり立ってローゼの肩を叩こうとしたが、あたる寸前で手を引っこめた。

「も、もういいです！ 先輩の好きにしてくださいっ」
「イシユメルは心配性だなあ。ちよっとくらいなら寄ってもだいじょうぶだって」

ローゼは苦笑いをしながら本屋に入った。

ウェストフォークの本屋は一階と二階にあり、一階は参考書などの置かれたフロアになっている。マンガ本やライトノベルは二階に並べられている。

「さてさて、二十九巻はどこに置いてあるのかなーっ」と

ローゼが二階にあがると、階段の近くに新作のマンガが山積みになっていた。ツープースの二十九巻もその一角に積まれてあった。

「うふお！ あったあった！ これだよこれ。俺が長年探し求めてたのは」

「無意味にぼけないでください」

ツープースの二十九巻を持って狂喜するローゼに、イシユメルは「はあ」とため息をもらす。

ローゼを置いて、イシユメルはフロアをそれとなく見てまわる。少女マンガが並べられた本棚のコーナーに入り、赤い字で書かれた背表紙をぼんやりとながめる。

「あ、この本」

一冊の本に目が止まり、イシュメルはそつと手をのばした。手にとった本の表紙には、『私の恋する執事様（十五）』と書かれている。

「このマンガ、もう十五巻まで出てたんだ。八巻までは持ってたけど、それから全然読んでないなあ」

イシュメルはうれしくなって本の表紙をずっとながめていたが、

「買うの？」

「ひゃあ！」

いきなりローゼに声をかけられて、あわてて本を本棚に返した。

ローゼはにやにやしながらイシュメルを見ている。

「その本、買いたいんじゃないの？」

「か、買いませんよ！ 仕事なんですからっ」

「えーっ、でもさっき、すごい欲しそうな顔してたよお？」

イシュメルは顔を赤くしながらそっぽ向く。

「わ、私のことはいいですから、早く、か買ってきてくださいよっ
！」

「イシュメルの本もいっしょに買ってあげようか？」

「だから買わないって言ってるでしょ！」

悲鳴をあげるイシュメルを見て、ローゼは「ふう」と息を吐いた。

「まったく、素直じゃないんだから。……いや、でもわかるよ。少女マンガには少女マンガのおもしろさがあるからね」

「少女マンガのおもしろさよりも、私の気持ちをわかってください」「俺も『君に届いて』はかなりはまったからね。うーん、マンガはやはり奥が深い」

「何をしみじみ語ってるんですか。てまさか先輩、少女マンガ読んでるんですか?」

「もちろん!」

ローゼは白い歯を見せて親指を立てた。

「俺は少女マンガから萌え系まで読む貞操なしだからね!」

「あーもう好きにしてください」

ツープースを購入して本屋から出ると、ローゼが着ているコートのポケットからぶるぶると振動が伝わってきた。

「ん、だれからだ?」

ローゼはポケットに突っこんで簡易通信機をとり出す。簡易通信機は、ソーサリーの力で音声を伝達するソーサリーツール（魔道器具）である。

ローゼは通信機の下方についているボタンを押して通信をつないだ。

「はい」

『ローゼ、楽しんでる?』

「そりゃあもう楽しんでますよ……って、エル!」

ローゼの声が思わず裏返る。通信してきたのはエレインだった。

通信機の受話口から聞こえてくるエレインの声はふるえている。

『それで、ツープースの二十九巻は買ったの？』

「えっ、二十九巻？　って、治安部に向かっているんだから、本なんて買えるわけ　」

『ふたりに何楽しそうに本屋デートしてるのよ！』

受話口から金切り声に似た怒声がひびき、ローゼは通信機をあわてて耳からはなした。

「エル、な、何で本屋にいるってわかるの？」

『あなたたちのことなんてすべてお見通しよ！』

「だから何で　」

ローゼがそう言いかけたとき、空から黒い球体がゆっくりと降りてきた。

球体は片手でつかめる大きさで、風船のように空中でぶかぶかと浮遊する物体だった。ローゼの目の前で停止すると横にくるりと自転して、目玉のような透明のレンズをこちらに向けた。

それはレンズに映し出した映像を使用者に送る、遠隔操作型のソーサリーツールだった。エレインが任務で好んで使用する

「これって、索敵用のソーサリーツールじゃ　」

『いちやいちやしてないで治安部に早く行きなさい！』

「は、はいっー！」

後ろにいたイシユメルも迫力に圧倒されて返事した。

* * *

「だから本屋に行くのはやめましょって言ったんですよ。私まで怒られちゃったじゃないですかあ」

「はは、だからごめんってー」

ツープースの入った鞆かばんを下げて、ローゼは今度こそ治安部へと向かった。

「しかし索敵用のツールで俺たちを監視してたとは、今日のエルはけっこう本気だなあ」

「何ですかそれ。……そんなこと言っていると、またお怒りの通信が来ちゃいますよ」

「う、それはまじで勘弁」

街はずれにある治安部のウェストフォーク支部は、繁華街から十五分くらいはなれた距離にある。イシユメルと会話をしながら道を歩くと、すぐに治安部へとたどりついた。

治安部の入り口は、階段をあがった先にある。イシユメルが階段を見上げて身体をふるわせた。

「こ、この上に、男の人がいるんですね」

「こじじゃなくても男なんているでしょ。……今からその調子で平気なの？」

「平気ですつ。い、行きましょー!」

イシユメルに急かされるように、ローゼは階段を上がった。

ローゼは扉を開いて治安部に入った。

「すいませーん」

首をきよるきよると動かして、ローゼはロビーを見まわす。

治安部のウエストフォーク支部は役所のようなところで、黎明の光団のような華やかなつくりではない。ロビーの床タイルは灰色くうす汚れていて、白い壁も埃っぽい色に変色していた。

ロビーの正面は受付カウンターになっているが、受付の女の子は立っていない。というより、ロビーに治安官がひとりもいなかった。

「だれもいないですね」

戸口の外からイシユメルが首をひょこつと出す。ローゼは「そうだね」と返した。

「昨日ダークライフが出たそうですから、みなさん外で巡回してるんですかね？」

「そうかもね。……ここで待っても仕方ないから、中に入るうか？」

「平気平気。いつもそうしてるから」

ロビーのわきに備えつけられた階段をのぼって二階へとあがる。二階は長い廊下が一直線にのびて、各部署の部屋へとつながってい

る。

ローゼが廊下を歩いていると、三つ先の部屋の扉が開いて治安官の男が出てきた。男はすぐにローゼに気づいた。

「あ、ローゼか」

「クライヴ中尉」

男　クライヴ中尉はブロンドの髪を短くカットした青年で、身長はローゼよりも少し高い。治安官の制服に身をつつんで紳士然としているが、襟の第二ボタンまでをはずしているから、少しラフなイメージがあった。

クライヴは口にくわえた煙草たばこをとってうすく笑った。

「よおエース。今日はずいぶん遅いご登庁で」

「だからエースはやめてっつていつも言ってるでしょ？　俺はエースなんかじゃないんだから」

「そう謙遜しなさんな」

クライヴはローゼの前まで来て笑った。

「お前がダーククライフをたおしてくれてるおかげで、俺たち治安官はいつも楽させてもらってるんだから」

「ああそう」

ローゼは面倒になって適当に返事した。

クライヴはローゼの後ろでたたずむイシユメルを見やる。彼女は顔をまっ赤にして身体をがたがたとふるわせていた。

「で、その萌えキャラは？」

「ん？ ああ」

ローゼは身体を引いてイシュメルを紹介した。

「この子は、今日からうちに配属になったイシュメル。俺のいつこ下で今年の新人だから、優しくしてやってね」

「へえ」

クライヴが顔を寄せると、イシュメルは「ひゃっ！」と二歩下がった。

「何か、すつごい拒否られてるみたいだけど」

「ああ、イシュメルは男が苦手だから」

「苦手の域超えてるだろ」

ローゼはイシュメルを見てため息をもらした。

「イシュメル、だいじょうぶ？」

「あ。……す、すいません。見るからに男性っぽかったので、身体が勝手に防御反応をしてしまいました」

「見るからにって何それ。オカマっぽいやつなら平気なの？」

「ローゼ先輩はあまり男性っぽくないのでまだ平気です」

「それは素直に喜んでいいのか？」

ローゼはこほんと咳払いして、クライヴの肩に手をのせた。

「イシュメル。この人は治安部の現場指揮者で、クライヴ・オリヴアー中尉。俺たちが直接コンタクトをとる人だから、おぼえという

ね

「よろしくね、イシュメルちゃん」

クライヴはにこつと微笑んで右手を差し出したが、すばやく半歩下がったイシュメルを見てげんなりした。

「これ、軽く傷つくな」

ローゼは苦笑した。

「ごめんね、中尉。別に悪気があるわけじゃないから」

「わかってるよ。……ところでローゼ、エレインさんは？」

「エルなら病院に行ってるよ」

「えっ！ 病院！？」

クライヴの目の色が変わった。

「エレインさん、もしかして昨日ので怪我したのか！？」

「違う違う。昨日、うちの団員が怪我して病院送りになっちゃったから、その見舞いに行ってるだけ」

「なんだあ」

クライヴは背中を丸めて息を吐いた。

「俺の愛しのエレインさんが怪我しちゃったのかと思って心配したよお」

「愛しのって何だよ。中尉はエルのこと好きなわけ？」

「ああ好きだぜ！ あのおっぱいとか特にな！」

「うわ、普通にサイテーだな、あんた」

「うるさい！ いつもいい思いしてる厨房がえらそうなこと言っな

「！」

クライヴは目から涙を流した。

「俺だつてな、俺だつてなあ……あの豊満なおっぱいでうりうりしてほしいのに！ お前ばつかいつもずるいぞ！」

「ずるいぞつて、俺に言われても困るんだけど」

「俺がこんなに想ってるのに、エレインさんはどうして俺に抱きついてくれないんだ！ なア、どうしてなんだ！？」

「あんたがド変態だからじゃないの？」

ローゼは白い目でクライヴを見た。

* * *

ローゼとイシュメルはクライヴに案内されて部屋の中に入った。木製のローテーブルと椅子が四つ置かれているだけの、小さな会議室のようなところだった。

「状況を軽く説明しとこうか」

向かいの椅子に座るクライヴに、ローゼとイシュメルが浅くうなずく。

「昨夜現われたダークライフは十六体。すべて人型で、司令塔のダークライフは高度なソーサリーをつかう」

「司令塔……ランシアとかいう子供みたいなダークライフのことだね」

ローゼの言葉にクライヴがうなずく。

「そうだ。やつは七、八歳くらいの子供にしか見えないが、れっきとした上位のダークライフだ。子供の皮をかぶった化け物だと思っただ方がいい」

「でも、いくらダークライフといっても、子供を傷つけるわけには……」

イシユメルが語尾をにごすとクライヴは頭を掻いた。

「だから、ランシアは子供じゃないんだよ」

「子供じゃない……？ それはどういう意味ですか」

「何でも、上位のダークライフは身体が死滅すると他人に憑依ひょういして身体を乗っとり、生体を維持する力をもっているみたいなんだ」

「他人に憑依……それはソーサリーか何かなのですか？」

「治安部の研究機関からの報告によると、そうらしい。確か、永生エターナルとかいう名前の術だったと思うが」

「永生……。聞いたことないです。そんな術」

「そうだろう。やつらの特殊能力みたいな術らしいからな」

「ということは、その永生エターナルという術で子供の身体に憑依しているんですね。ランシアという上位のダークライフは」

「そういうことだ」

クライヴがにこっと微笑むと、イシユメルはあわてて視線を逸らした。

「上位のダークライフはソーサリーに長けてるやつばかりだからな。黎明れいめいのソーサリーでも苦戦するのは仕方ないだろう。チビだけど厄介だぜ、あのランシアっていうやつは」

「でも、ランシアをたおさないとまた街が襲われて、俺らも夜中に駆り出されることになるんだよね。それは勘弁してほしいなあ」

ローゼがつぶやくと、クライヴはすつくと立ち上がった。

「うちも昨晩から寝ずに街の見張りをやらされてるよ。こんなのが連日つづいたら、俺たちだってそのうちたおれちまう。だから、一刻も早くランシアを捕まえなければならぬ」

「そうだけど、ランシアはあれから見つかったの？ やつの所在がわからなきゃ、探しようがないよね」

「そうなんだよな」

クライヴが頭をわしわしと掻いた。

「目撃者の情報から推測すると、やつは南に逃げたみたいなんだが、見つかったという報告はまだ受けていない」

「逃げたと思わせといて、街に潜伏してる可能性は？」

「それももちろん考慮して街を巡回させてるが」

「見つかってないんだね」

閉口するクライヴに、ローゼが「困ったなあ」とうなり声をあげる。そのとなりでイシユメルが目を瞬いた。

「でも、オブスから来たダークライフは日の光に慣れてないから、お昼はほとんど活動しないんですよ。ですから、徹夜で警備しなくても平気なんじゃないんですか？」

「原則としてはそうなんだけどね。ダークライフは夜行性だから。

……でも上位のダークライフは頭がいいから、その裏をかいて昼に襲ってくる人が多いんだよ」

「そうなんですか？」

「黎明の第二陣（研究機関）が出した統計によると、それで滅ぼされた街はけっこう多いみたいなんだ。だから、俺たちも昼夜ちゅうやを問わずに警備を強化しなきゃいけないんだ」
「そうだったんですか……」

イシュメルが顔を青くした。

クライヴは胸のポケットから煙草をとり出して、一本を口にくわえた。

「とりあえず、俺らの今の課題はランシアを捕まえることだ。そしてやつらが人間界にやってくるときに開いたゲートを探して、これを封印する。ゲートを閉じないと、やつらは次々と現われるからな」
「そうだね」

ローゼが言いかけたとき、クライヴが突然通信機をとり出した。

「何だ。……ん、ああ。……何っ、ランシアが現われたって!？」

思わぬ報にローゼとイシュメルは顔を見合わせた。

ローゼはイシユメルを連れて治安部を飛び出した。

「先輩の言うとおりでしたね」

「そうだね。……でも、こんなに早く現れるとは思わなかったよ」

「ダークライフは、繁華街のある三番街に現われたみたいですよ。早く行きましょう！」

「了解っ！」

ローゼは正面出口の階段を駆け下りて、コンクリートの道をひた走る。その後をイシユメルがつづいた。

ウェストフォークは、一番街から十二番街までの十二の区域エリアに分かれている。

街はボールのような正円の形をしており、それを十二の区域がきれいに等分している。

街の中心から扇型にカットされた区域は時計盤のように整然とならばられ、北北東 時計の一時の位置に一番街が配置されていた。

一番街から右回りに二番街、三番街とつづき、真北に十二番街が配置される。

ダークライフのランシアが現われた三番街は、先ほど寄った本屋のある繁華街がある街である。ローゼとイシユメルは、二番街にある治安部から繁華街へと南下した。

* * *

三番街に着くと、街は逃げ惑う人々であふれていた。平日の少しゆっくりとした空気はなく、人々の表情は恐怖でゆがんでいる。

遅かったか。

ローゼは拳をにぎって歯ぎしりする。街の中央を伸びるメインの大通りに、倒れている人の姿を見てしまったからだった。

大通りの奥　お城のような形をしたデパートや建物が並ぶ場所に、空色の制服を着た治安官の姿があった。彼らは小型の魔道銃をかまえて、建物の屋根に向かって発砲している。

そのまわりには、白いマントを羽織ったソーサラーたちの姿もあった。

また魔道銃とは、アニメで自動的につくり出した弾を飛ばすソーサリーツールである。

「ローゼ先輩！　治安官の人たちがあそこで発砲してます！」

イシユメルが街道の奥を指差す。ローゼは「ああ」と浅くうなずいた。

「戦闘がもうはじまっちゃってるみたいだね。俺たちも急がないと」「でも先輩、治安官の人たちはどうして屋根の上を狙って　せせ先輩！　あそこ！」

イシユメルが大きな目を見開いて叫ぶ。治安官たちが発砲してい

る屋根の上を見上げると、そこに黒い髪を生やした少年の姿があった。

少年は身体から漆黒のアニメを放っている。彼は治安官たちを見下ろしたまま一歩も動いていないが、彼の殺意と禍々しさが波動となつてびりびりと伝わってくる。

「先輩。……あ、あの子が」

「ああ。あいつがランシアだ」

ローゼは忌々しげにつぶやいた。

ランシアは治安官たちを見下ろしたまま、おもむろに右手をふりあげた。湯気のようにゆっくりと立ち上っていたアニメが、急速に渦を巻いてランシアの手の上に集約される。

ブラックホールのようなアニメの渦の中心が横長に伸びて、三本の黒い槍が出現した。

何だあれは。

ローゼは思わず絶句する。漆黒の槍はみるみるうちに横に伸び、鉄柱のような太さと強靭さを得ていく。

ランシアはうすく笑い、暗黒の鉄柱を放り投げた。柱は大きくうねりを上げながら地面に激突し、ずがん！ とはげしい爆音を鳴りひびかせる。

舞い上がる砂塵の中から、治安官とソーサラーたちの悲鳴が聞こえた。

「やめるオオオオ！」

ローゼは走りながら魔法語をとる。後ろに引いた右手の平にアニメが集約し、ばちばちと電気の球が具現化される。

「電撃オオオ！」

ローゼは電撃をランシアに放り投げた。球はあたる寸前で三つに拡散し、三方からランシアに襲いかかる。

ランシアはとっさに跳躍して電撃をかわす。三つの電撃は宙でぶつかり合い、雷のような轟音を鳴らした。

「またあなたですか。ローゼ・シーグムンド」

路上に降り立ったランシアが、ローゼをきつとにらみつける。ローゼは腰を落として身がまえた。

「それはこっちの台詞だよ、ダークライフ。それに俺は、あなたに名前を教えた覚えはないんだけどね」

「われわれの情報網を甘くみてもらっては困りますよ。あなたとエリン・ユーフェミアは、第一の危険人物ですからね。あなたたちの素性はすでに調べてあるのです」

ランシアは目を細めて笑った。

「ローゼ・シーグムンド。ソーサリー団体『黎明の光団』に所属するソーサラー。クラスはソーサラー・ミドル。グループは第一陣治安会第十五団に所属し、治安部とともにウェストフォードの治安維持を担当している」

「……本当に俺のことを調べてるみたいだね。マニアックなファン

「がいたもんだ」

「下らないことで誤魔化そうとしても無駄ですよ」

ランシアは表情をがらりと一変させた。

「あなたは半年前、魔道生命体ダークコランダムをたおした危険人物です。いくらとぼける素振りを見せても、私はだまされませんよ」

ローゼは半歩後ろにたじろいだ。

「魔道生命体？　ダークコランダム……？」

ローゼの後ろでイシュメルが目を瞬く。ローゼは「ち」と舌打ちした。

「ダークコランダムは、半年前にこいつらダークライフがつくり出した魔法生物のことだよ」

「魔法生物……！？　でも、生命の創造は団体で禁じられてるはずです！」

「それは人間界でのルールだよ、イシュメル。こいつら異世界から来た連中にそんなものが通用すると思うかい？」

「そ、それは……」

イシュメルは口をつぐんだ。

「こいつらは、オプスで採れるブラックサファイアという宝石を集めて、巨大な魔法生物をつくりあげた。それが魔道生命体ダークコランダムさ。ダークコランダムは全長十メートルを超える途方もない魔法生物でね、それをウエストフォークに送りこんできたんだよ、こいつらは」

「そのダークコランダムを、エレイン団長とおふたりで討伐したんですか？」

「まあ、そんなとこだね。他にも治安部やみんなの助けを借りて、何とか辛勝……て感じだったんだけどね」

「そうだったんですか……」

啞然とするイシュメルを見て、ランシアが首をかしげた。

「おや、そのポニーテールの方は私たちのデータにないですね。では新手ですか」

「そうだよ」

ローゼはイシュメルを背中中で隠した。

「イシュメルはうちの期待の新人なんだ。汚らしい目つきで視姦しかんしないほしいね」

「それをあなたに言われたくありませんよ。ブルマフェチのローゼ・シーグムンド」

ぎくりとするローゼの後ろで、イシュメルが白い目を向ける。

「先輩、ブルマフェチって……？」

「な、何でもない。何でもないよー！ さ、いくぞイシュメル！」

ローゼはいきり立ってランシアに突撃した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5503z/>

あれがソーサラー

2012年1月11日23時53分発行